関西自然保護機構会報 *21*（*1*）：*13－19, 1999*

東京都におけるネコの野生化とそれに対する地域住民の意識

東京農工大学農学部野生動物保護学研究室　神　崎　伸　夫
東京農工大学農学部野生動物保護学研究室　村　田　晴　子
東京農工大学農学部野生動物保護学研究室　金　澤　文　吾

PRESENT STATUS OF FERAL CATS IN TOKYO AND PUBLIC ATTITUDES TO THEM

Nobuo KANZAKI　*Wildlife Conservation, Faculty of Agriculture, Tokyo Noko University*
Haruko MURATA　*Wildlife Conservation, Faculty of Agriculture, Tokyo Noko University*
Bungo KANAZAWA　*Wildlife Conservation, Faculty of Agriculture, Tokyo Noko University*

はじめに

紀元前二千年から千年の間に古代エジプトにおいて家畜化されて以来，ネコはイヌと並んで重要なペット（コンパニオンアニマル）として扱われてきた（クラットンブロック，1988）。ネコは，様々な文学作品，絵画，映画の題材として用いられてきている。近年になるとネコを利用した動物介護療法（アニマルアシステッドセラピー）なども紹介され（有馬，1996），核家族化，高齢化が進む中で，その重要性がより強く認識されるようになっている。

一方で，無責任な飼い主による飼育放棄も増加し，野生化ネコも急増している。東京都により報告された飼い主のいないネコの数は11万匹にも上っている（東京都衛生局，1999）。確かにネコを町中で見かける機会は多い。そのようなノネコは町の風景にとけ込み，好ましいものとして捉えられているきらいがある。ネコは過密化の進む都市にうるおいをもたらす存在であると考えられることもある（林，1996；香取ほか，1999）。

しかし，ノネコに対して問題点を指摘する声も決して少なくなく，様々な主張が新聞や雑誌などで紹介されている（例えば，毎日新聞1998年8月9日，朝日新聞1998年5月17日，10月7日）。その主張を整理すると二つに分けられるようである。一つはノネコ嫌悪派のものであり，ネコの鳴き声，糞尿，悪臭，ゴミあさりなどが問題点としてあげられている。それに対抗するのがノネコ擁護派のものである。彼らがノネコを擁護するもっとも大きな理由として，ノネコの増加の原因は無責任な人間にあるのであって，ネコにはないとするものである。そしてノネコ擁護派は，嫌悪派との間の軋轢を解消するために様々な対策を打ち出している。その事例として横浜市磯子区が1997年に行ったホームレスネコ防止対策事業があげられる。この取り組みの結果，地域猫という考え方が生まれ，不妊・去勢手術による個体数抑制，餌場，トイレの固定化などがはかられている（香取ほか，1999）。埼玉県で野良猫に不妊手術をする人に助成金を出す運動を行っているのも，この例の一つだろう。このような運動は新聞やテレビなどのメディアに好意的に受け取られているようである。

しかし，鳴き声や糞尿などの問題が解決すれば，都市にノネコがいてもよいのだろうか。これらの

議論には，ネコが他の野生動物に与える影響についての視点が欠けている。ネコは肉食獣であり，家畜化の目的が小麦などの穀物をネズミから守ることであったため，狩猟本能は残存している（クレヴァー，1985)。実際にノネコが他の野生動物を補食により激減させ，絶滅に追いやった事例は数多くある（Fitzgerald, 1986：テイバー，1991)。都市においても，昆虫，小型哺乳類，鳥類などを補食している（ライハウゼン，1982)。

自然保護や回復の対象となる地域は山間地だけではない。私たちの居住環境においても，できるかぎり豊かな自然が配置されているべきだし，それがアメニティにつながることが指摘されている（日本生態系保護協会，1992：澤木，1999)。かつてその地域に属していなかった肉食動物を導入すると，生態系に壊滅的な打撃を与えることは，三宅島に導入されたイタチや奄美大島に導入されたマングースの事例（樋口，1981：山田・杉村，1999）をみるまでもなく明らかである。

本報で紹介する研究は，東京都においてノネコが都市の自然環境に与える影響を評価すること，ノネコに対する地域住民の意識を検討するために企画され，現在も進行中である。これまでに得られた結果について報告したい。本論文を作成するにあたり，東京都衛生局生活環境部獣医衛生課の皆様には，1998年度に実施された調査のデータを使用することについて快諾していただいた。厚くお礼を申し上げます。

東京農工大学農学部キャンパスのノネコについて

東京農工大学農学部府中キャンパスは，東京都府中市の北部に位置し，公道を挟んで住宅地や学校に囲まれている。キャンパスの面積は27 haで，農場がその半分を占めている。キャンパス内では日常的にノネコを見かけることができる。また，獣医学科や付属家畜病院があるせいか，ネコが捨てられているのをみかけることもある。府中キャンパスに生息するノネコの実態を明らかにするために以下の調査を実施した。

先ず，1998年3月に構内（11 ha）をくまなく歩き，25頭のノネコが生息していることを確認した。ノネコの生息密度は228頭/km^{2}となり，長崎市十人町の3100頭/km^2（Izawa et al., 1991）や福岡県相ノ島の2350頭/km^2（Izawa et al., 1982）に比べると低かった。

ノネコの食性を明らかにするために，1998年5月から1999年1月にかけて大学構内で採集した糞134個の分析を行った。食物項目はキャットフード，昆虫，草，その他の4つにわけ，春（5月～6月)，夏•秋（7月～10月)，冬（11月～1月）の3期ごとに出現率を求めた。どの時期においても，ほぼ全ての糞からキャットフードが出現した（春，100%；夏•秋，96%；冬，100%）（表1)。昆虫の出現率は春30%，夏•秋16%，冬10%であった。後述するルートセンサス中にハトやネズミを襲っているのが観察されたが，げっ歯類は全く出現せず，鳥類の出現も春の一例にとどまった。

次に，ノネコの社会構造を明らかにするために，ルートマッピングを行なった。調査は1998年5月23日（土）から6月2日（火）までの10日間，6時，9時，12時，15時，18時の5回，大学構内をほぼ網羅するように定めた調査ルート（3.6

表1　東京農工大学府中キャンパスに生息するノネコの食性の季節的変化.

項目	出現頻度（%）			
	春(n=70)	夏•秋(n=25)	冬(n=39)	計
キャットフード	100	96	100	99
昆虫	30	16	10	22
草	27	20	54	34
その他	9	0	3	5

km）上を一定速度で歩き，発見した個体の位置を地図上に記録した。府中キャンパスには4つの餌場グループが確認され，25頭中18頭（雄11頭，雌7頭）はいずれかのグループに属していた（表2）。これらの餌場は府中キャンパス近くの住民により維持されているものであった。餌場ごとに出現する個体がほぼ決まっており，それぞれの個体数は8頭，6頭，2頭，2頭であった。雄11頭のうち4頭は去勢手術が，雌7頭のうち5頭は避妊手術が行われていた。Izawa et al.（1982）は餌が豊富な場所では，餌場グループが形成され，密度が高くなることを報告している。府中キャンパスにおいても，地域住民による定期的な給餌が行われている結果，餌場グループが形成されたものと考えられる。しかし生息密度が他地域ほど大きくなっていないのは，避妊，去勢手術が多くの個体に対して行われていたためかもしれない。これらの餌場グループを構成するメンバーの血縁関係は確認できていないが，給餌者によるとこれらのグループに新しく捨て猫が加わることがあるとのことである。避妊，去勢手術の結果，攻撃性がうすれ，必ずしも餌場グループが血縁個体により形成されていない可能性がある。

表2　東京農工大学構内に生息するノネコの餌場グループ.

固体No.	性別	餌場			
		①(8頭)	②(6頭)	③(2頭)	④(2頭)
4	オス	◎			
5	オス	◎			
2	オス*	◎			
7	メス*	◎			
1	メス*	◎			
3	オス*	◎			
8	オス	◎	○		○
25	メス	◎	○		
11	オス		◎		
10	オス		◎		
12	オス*		◎		
24	オス*		◎		
9	メス*		◎		
15	メス		◎		
16	オス*			◎	
23	メス*			◎	
14	オス				◎
18	メス*				◎

＊：避妊・去勢されていた固体.
◎：その餌場を常時利用，○：その餌場を一時利用.

以上のことから，府中キャンパスのノネコは，キャットフードを主体とする給餌物に依存し，餌場グループを形成していることが明らかになった。他の野生動物の補食は数例しか確認できず，その影響の程度は明確にできなかった。しかしこれは利用可能量が低かったことによる可能性もあり，さらなる調査が必要である。

東京都国分寺市，府中市におけるノネコの集合場所と給餌実態

府中キャンパスのノネコが給餌により維持されていることが明らかになったので，調査地域を拡大し，東京都国分寺市，府中市におけるノネコの集合場所とその集合理由を調べた。府中市・国分寺市で開業している獣医師（23件）とペットショップ店員（13件）をNTTタウンページで調べ，電話及び直接面談形式による聞き取り調査を行った。質問項目は，1）ノネコの集まる場所，2）ノネコが集まる理由である。また，ネコに給餌を行っている地域住民を紹介してもらった。そして府中キャンパスにおける給餌者を含む9人を対象に，給餌の実態やノネコに対する意識について聞き取り調査を行った。

この調査から，府中市・国分寺市内のノネコの集合場所として31箇所が確認され，公園8箇所（26%），大学4箇所（13%），霊園4箇所（13%）

表3　東京都府中市・国分寺市におけるネコの集合場所.

場所	回答数	(%)
公園	8	(26)
大学	4	(13)
霊園	4	(13)
住宅	3	(10)
病院	3	(10)
駐車場・空き地	2	(6)
ごみ捨て場	2	(6)
神社	2	(6)
その他	3	(9)
計	31	(100)

表4　東京都府中市・国分寺市の集合場所にノネコが集まる理由.

理由	回答数	(%)
給餌されているから	13	(45)
捨てられるから	9	(31)
ゴミ捨て場があるから	4	(14)
休息場所があるから	3	(10)
不明	0	(0)
計	29	(100)

の順になった(表3)。ノネコの集まる理由は，給餌されているからが13件（45%）ともっとも多く，次いで猫を捨てる人がいるからの9件（31%）となった（表4)。

給餌者9人を対象とした聞き取り調査によると，与える餌の種類は9人全員がキャットフードと回答し，さらに肉•魚を与える回答者も5人いた（表5)。餌を与える回数は1日に1回以上という回答（8人）が多く，給餌継続年数は3年以上（7人）が多かった。給餌にかける費用は1月あたり1万円以上が5人と最も多く，10万円以上を使用する回答者もいた。給餌を行う動機としては，「ネコが好きだから」が7人，「動物愛護のため」が6人と多かったが，「都市環境に必要だから」，「害獣を駆除してくれるから」と回答した

表5　東京都府中市・国分寺市における給餌の実態.

a）給餌に使用する食物（n＝9)(複数回答可)

食物	回答数	(%)
キャットフード	9	(100)
残飯	2	(22)
肉・魚	5	(56)
お菓子	2	(22)
その他	1	(11)

b）給餌回数（n＝9）

給餌回数	回答数	(%)
1日2回以上	3	(33)
1日1回	5	(56)
3日に1回	1	(11)

c）毎月の餌代（n＝9）

餌代	回答数	(%)
1,000円以内	2	(22)
3,000～5,000円	1	(11)
5,0000～10,000円	1	(11)
10,000円以上	5	(56)

表6　東京都府中市・国分寺市における給餌者の給餌理由（複数回答可).

理由	回答数	(%)
ネコが好きだから	7	(78)
動物愛護のため	6	(67)
都市環境に必要だから	0	(0)
害獣を駆除してくれるから	0	(0)
その他	1	(11)

人はいなかった（表6)。4人の給餌者が，ノネコの避妊去勢手術を自費で行っていた。

本調査から，府中市，国分寺市においても，ノネコが集合する主要な要因として給餌があることが明らかになった。使用される餌が残飯などではなく，イエネコと同じキャットフードであること，給餌は定期的に行われていること，ネコが好きだ

から給餌を行っている人が多かったことは，ノネコがイエネコと同じようにペットとして給餌者にみなされていることを示唆している。

東京都民のネコに対する意識

東京都は，島嶼を除く地域に116万頭ノネコが生息していると算出した（東京都衛生局，1999）。そしてそのうち約半分の56万頭が屋外に生息しているものと推定している。これらのネコも給餌に依存しているのだろうか。東京都により行われたアンケート（東京都衛生局，1999）のデータを使用して，都民のノネコに対する意識を検討したい。このアンケートは東京都の江戸川区，江東区，台東区，品川区，杉並区，調布市，三鷹市，東大和市，東村山市，青梅市，町田市，八王子市から無作為に抽出した都民を対象に行われたものである。アンケート用紙の発送数は6000件，回収数が1901件で回収率は31.7%であった。調査項目は，(1) ネコに対する意識，(2) ノネコに対する行動，(3) ネコの飼育法であった。

アンケートの回答者1,901人のうち，ネコを好きな人は629人（33.4%），嫌いな人は633人（33.9%），どちらでもない人は611人（32.7%）であった。ネコの好き嫌いに男女差は見られなかったが，年代が高くなるとともに猫を好きな人が減少し，嫌いな人が増える傾向が見られた（図1）。これは，加齢とともにネコ嫌いが増えるというよりも，それぞれの年代の家族構成に関係しているのかもしれない。つまり若い年代の方が，少子化，核家族化のせいで家族の構成人数が少ないこと，経済状態がよくなりペットを飼っている家庭が増加したことにより，ペットの家族的な役割が大きくなっていることの影響を受けている可能性がある。

ネコを飼育している回答者は228人（13.1%）であった。ネコを屋外に出している人は125人（53%）で，そのうち避妊去勢手術をしていない人が15人いた（表10）。ノネコがいた場合に給餌をすると回答した人は99人（4.6%）であり，そのうち35人は避妊去勢手術も行うとしていた。ネコが好きな回答者のうち，ネコに餌をあげたいと考える人の比率を年齢別にみると，男女で異なる傾向が得られた（図2）。女性は40代までは加齢とともに増加するが，40代で20.0%とピークを迎えその後減少した。一方男性は40代がもっとも低く0%となるが50代，60代になると急増した。これは，国分寺市，府中市の給餌者に対す

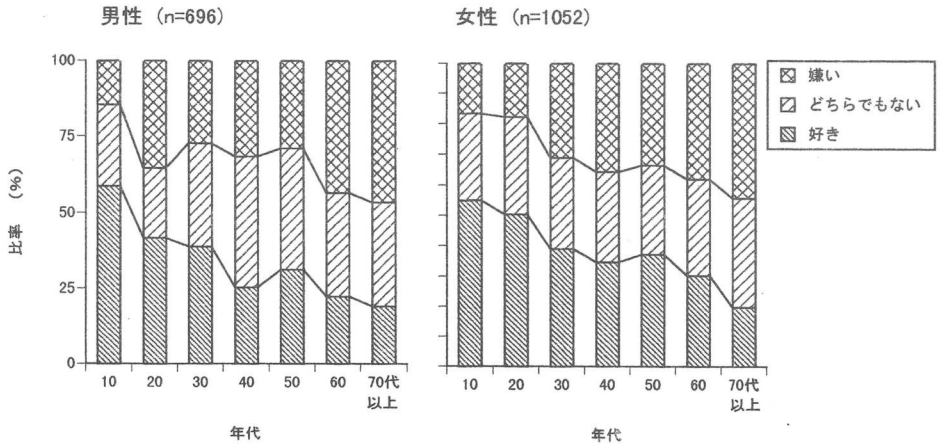


図1　東京都民の性，年令別のネコの好き嫌い.

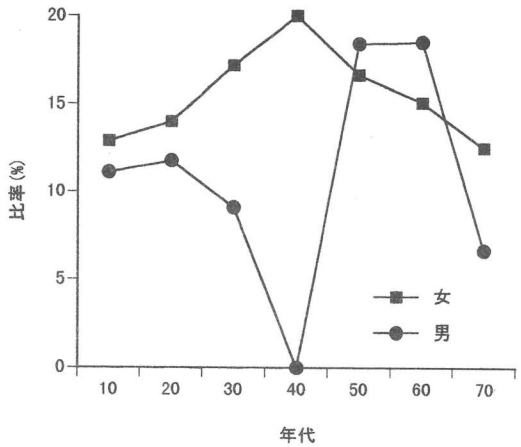


図2　ネコが好きな都民のうちネコに給餌したいと考える人の比率.

るアンケートからも明らかなように，ノネコをペットのように愛情を注ぐ対象として考えていることに関係している可能性がある。女性は40代で給餌する人の比率が最も高くなるのは，この時期に子供が親離れをしたり，夫が仕事で忙しい時であり，愛情を注ぐ対象をノネコに求めるが，50代，60代になると孫ができたり，夫の仕事が一段落しその必要がなくなるためかもしれない。一方，男性は40代には仕事が忙しいためその余裕がないものの，50代，60代になると仕事を離れるようになるため，ネコに餌をあげるようになるのかもしれない。この解釈を行うためには，さらに多くの回答者についてその動機を聞く必要があろう。

飼育しているネコを屋外に出している125人のうち，15人（12%）が避妊，去勢を行っていなかった。屋外飼育ネコは45万頭と推定されているので，ノネコ以外に繁殖可能なネコが5万頭以上いることになる。またノネコに給餌すると回答した人は4.6%であるので，55万人の都民が給餌をしている可能性がある。これらすべての人が国分寺市，府中市で聞き取りを行った回答者のような給餌は行っていないだろうが，ネコが東京都で生き延びていくための背景は整っていそうである。避妊，去勢手術を行うとした回答者もみられたものの，それは1回あたり1万円～2万円もかかるため，個体数の増加には追いつかないことが予想される。

以上の結果から，ノネコの増加を防ぐ様々な試みはあるものの，それを上回る規模でノネコが増加する可能性があることが明らかになった。そしてそれを支える給餌者は，都市の自然とノネコのありかたという視点は持っておらず，ノネコをペットとして考えている傾向が強いように思われる。府中キャンパスで行ったノネコの食性調査から，ノネコが他の野生動物に与える影響は明確にできなかったものの，東京都小笠原で報告されているように（毎日新聞1998年4月20日），他の野生動物に影響を与えることは必至である。都市における自然保護をどのように進めていくかという観点からも，ノネコ問題を考えていくことが必要である。

参考文献

有馬もと. 1996. 人はなぜ犬や猫を飼うのか. 221pp. 大月書店，東京.

クラットンブロック，J. 1988（小川昭子訳，1998）. 猫の博物館. 157pp. 東洋書林，東京.

Fitzgerald, B. M. 1986. Diet of domestic cats and their impact on prey populations. In: The Domestic Cat: the Biology of its Behaviour (eds. Turner, D. C. & Bateson, P.), 123 － 144. Cambridge University Press, Canbridge.

香取章子・信夫京子・吉田晃子. 1999. 特集ニュースとなった犬と猫. シンラ，6（2）：26－51.

林　丈二（1996）猫はどこ？　211pp. 廣済堂出版，東京.

樋口広芳（1981）鳥類生息調査報告書－島嶼にお

けるイタチ放獣が野生鳥類に与える影響－. 58pp. 東京都. 東京.

Izawa, M. , Doi, T. and Ono, Y. 1982. Grouping patterns of feral cat (*Felis catus*) living on a small island in Japan. Japanese Journal of Ecology, 32 : 373－382.

Izawa, M. Doi T. and Ono Y. 1991. Notes on the spacing pattern of the feral cats at high density. Bulltein of Kitakyusyu Museumu of Natural History, 10 : 109－113.

クレヴァー, ウルリッヒ. 1985 (増井光子監修, 1987). 猫の本. 343pp. 同朋舎出版, 京都.

日本生態系保護協会. 1992. 日本を救う「最後の選択」. 222pp. 情報センター出版局, 東京.

ライハウゼン, パウル. 1982 (今泉吉晴・今泉みね子訳, 1998). ネコの行動学. 366pp. どうぶつ社, 東京.

澤木昌典. 1999. 環境共生の都市づくり・生物と緑と水と土.「都市のリ・デザイン」(鳴海邦碩編) 183－216. 学芸出版社, 京都.

テイバー, ロジャー. 1991 (丸　武志訳). 猫たちの世界旅行. 217pp. 日本放送出版協会, 東京.

東京都衛生局. 1998. 東京都におけるネコの飼養実態調査報告書. 東京都衛生局, 東京.

山田文雄・杉村乾. 1999. 奄美大島におけるマングースの管理. 関西自然保護機構会報21(1) : 31－41.